

事 記 載 揭

雨漏り、水漏れ、カビ、空調不調…



電子顕微鏡を保護するためテントを張った部屋で、水漏れの跡が残る天井を見つめる勝見所長＝仙台市若林区の市衛生研究所

PCR最前線施設は限界

新型コロナウイルス感染の有無を調べるPCR検査を担う仙台市衛生研究所(若林区卸町東)が、庁舎の老朽化で厳しい環境に置かれている。築40年の建物は雨漏りがひどく、配水管からの水漏れも相次ぎ、空調設備などに問題を抱える。PCR検査の体制には影響ないが、他の検査は装置や機器の上にテントを張って水漏れから守るなど、窮余の策でしのいでいる。

仙台市衛生研

1980年7月に完成した現庁舎は、鉄筋コンクリート4階の建物。PCR検査が行われているウィルス室、細菌や水質、大気などの各分析室、電子顕微鏡室などがある。老朽化が目立ち始めたの

は東日本大震災後、天井から雨漏りや水漏れするようになった。劣化した窓枠のバッキンや換気扇と壁の隙間から雨水が染み出した。漏水箇所にはカビが生え、精密な検査に深刻な影響を及ぼしかねないという。

正確性、安全性は確保 移転新築 計画に遅れ

屋上に防水塗装を施し、配水管を防水テープでぐるぐる巻きにして、水漏れを食い止めようと試みたが、次から次に見つかった問題箇所は応急修理した所も含めると数十カ所に及んだ。空調設備が古く、吸排気のバランスが悪いため、検査室の気圧の調整が難しい。気密性を確保するためには、窓枠にテープを貼って固定するなど手作りの対策に頼らざるを得ない。勝見正道所長は「さまざま工夫で、検査の正確性や安全性だけは確保しているが、このままですと高い検査水準を維持するなら、

庁舎はもはや限界に近い」と窮状を訴える。市は2019年度、衛生研を宮城野区の市有地に移転し、鉄筋コンクリート3階の新庁舎を建て、24年度に使用を開始する基本計画を策定した。だが、今年3月20日以降、市内の感染者が19日連続で確認され、PCR検査の依頼が増えた。最大1日104件を検査するなど全職員40人が総力戦で臨み、20年度に予定する新庁舎の基本設計の契約が遅れている。勝見所長は「近年、ほぼ5年おきに世界で新たな感染症が問題になる。衛生研は健康危機管理の科学的根拠を得る重要拠点。市財政は厳しいが、市民の安全のため、早く環境を整えなくてはならない」と話した。

新聞

(昭和32年1月28日第三種郵便物認可)

第18450号

宮城版

局 仙台市青葉区春日町7-5
編集部(022)221-4602
営業部(022)221-4604

FAX
編(022)217-4170
営(022)268-6416

仙台市

延べ4635㎡、ピロティなど浸水対策検討

山下設計と随意契約へ

衛生研究所移転改築の基本設計

仙台市は、若林区にある衛生研究所の移転改築に向け、建築・設備に係る基本設計をいずれも山下設計と随意契約する。見積もり合わせは建築が今月26日、設備は同14日に行う。

衛生研究所は、若林区卸町東2の5の10地内にある感染症調査や細菌・ウイルス検査、食中毒の原因調査、土壌および底質の検査・調査研究などを行っている機関。当初、既存施設の老朽化に伴う設備更新に向け改修基本計画(担当は昭和設計)を行ったが、更新に比べ移転改築の方がコストが縮減できることから方針を切り替えた。

現在の計画では、宮城野区扇町6の3の5、6地内にある市が所管する倉庫敷地の一部に移転。施設規模は延べ4635平方メートルを想定しており、近くを流れる

2級河川梅田川の浸水区域に該当するため、ピロティ構造の採用など浸水対策の実施を検討している。基本設計業務の履行期限は建築・設備ともに202

1年3月31日までとしており、今回業務の結果を踏まえ今後のスケジュールを検討したいとしている。

2 新型コロナウイルス感染症と向き合う現場から

仙台市政だより 令和2年11月号

新型コロナウイルス感染症と向き合う現場から

新型コロナウイルス感染症対応として、「PCR検査」や「感染症指定医療機関での治療」という言葉をよく耳にしますが、これらはどのように行われているのでしょうか。日々、緊張と責任感を持って最前線で対応している仙台市衛生研究所と仙台市立病院の現場の様子をお伝えします。

特集①

仙台市衛生研究所

新型コロナウイルス感染症の有無を判定

市民の健康と生活環境を守るため、感染症をはじめ、大気、水質、食品衛生などのさまざまな検査を行っている衛生研究所。PCR検査は、県内の複数の機関で実施していますが、市内の帰国者・接触者外来等で採取された検体は、原則として衛生研究所で検査しています。

PCR検査では、鼻の奥を拭いた粘液や唾液から遺伝子を抽出し、新型コロナウイルス特有の遺伝子を増幅させることで感染の有無を調べます（下図参照）。衛生研究所では、検体数に応じて3～8人の職員がチームを組み、多いときには1日で100件を超える検査を行っています。検体を取り扱う際は、防護具を着用した上で、空気が外部に漏れないエアフィルタ1内で作業を実施。正確な判定と二次感染の防止のため、細心の注意を払いながら一つ一つの作業を進め、翌日までは結果を保健所に報告しています。

感染を早期に発見し、拡大を防ぐため、万全の体制で検査を実施していきます。

正確かつ迅速にPCR検査を実施します

PCR検査の実施に当たって特に心掛けていることは、正確に判定結果を出すということです。一方で、スピードも大切です。新たに導入した遺伝子の抽出



衛生研究所・勝見正道所長

と増幅をまとめて行うことができる機械も活用して、より迅速な検査の実施を目指します。

これからインフルエンザのシーズンがやってきます。新型コロナウイルス感染症とインフルエンザの自己判断は難しいので、もし、発熱や咳、倦怠感等の症状が現れたら、ためらわずにかかりつけの医療機関または、仙台市・宮城県の健康電話相談窓口へ、まずはお電話でご相談ください。早期の感染発見はクラスターの発生を未然に防止することにもつながります。

大切な人の命を守るため、手洗いやマスクの着用など感染予防にご協力をお願いいたします。

PCR検査の流れ

- ① 検体の受け付け**
3重に梱包された容器から検体を取り出し、保健所から送付された名簿と検体に記載された氏名が一致しているか等を、複数人で確認します
- ② 検体の前処理**
検体に薬品を入れて攪拌し、ウイルスを完全に死滅させます
- ③ 遺伝子の抽出**
検体を専用の機械に入れ、不純物を除去して遺伝子を抽出します
- ④ 遺伝子の増幅**
抽出した遺伝子に新型コロナウイルス特有の遺伝子を増幅させる試薬を混ぜ、専用の機械で遺伝子が増幅していくかどうかを確認します。増幅が確認された場合は、陽性と判定します



仙台市・宮城県の健康電話相談窓口（コールセンター） ☎211・3883、211・2882（24時間受け付け）
※聴覚や言語に障害のある方の相談はFAX211・3192でも受け付けています

4 「コロナ検査の要」 仙台市衛研が移転新築へ 感染症への備え増強

河北新報 2021年12月16日朝刊

「コロナ検査の要」 仙台市衛生研が移転新築へ 感染症への備え増強

2021年12月16日 6:00



老朽化が進み、25年度に移転新築される市衛生研究所 = 仙台市若林区卸町東2丁目

仙台市は15日、施設の老朽化が進む若林区卸町東2丁目の市衛生研究所を2025年度、宮城野区扇町6丁目の市有地に移転新築する方針を正式に公表した。新型コロナウイルスの流行で、検査の最前線として連日稼働する拠点施設を建て替え、未知の感染症にも即応できる体制を整える。

計画によると、新庁舎は鉄筋コンクリート4階、延べ床面積4607平方メートル。検査室はレイアウトを随時変えられるよう、可動式のパーティションで区切る。感染症の拡大時などの検査ニーズに合わせ、設備を増やしたり、職員を集めたりできるようにする。

立地場所は梅田川に近接する。市の防災ハザードマップで0.5～3.0メートル未満の洪水浸水想定区域にある。浸水被害に備えて1階は駐車場とし、2階以上に理化学課、微生物課を配置する。屋上には受電設備や非常用電源を備える。

衛生研は20年10月にPCR検査機器を増やし、受け入れ検体数を1日10件から240件に拡大。21年8月には変異株の流入を迅速に把握するため、次世代遺伝子解析装置も導入した。建物の構造上、レイアウトを変更できず検査室を分けて対応しているため、作業効率性が課題となっている。

市は22年夏に新庁舎の実施設計を終え、同年度中に工事に着手する方針。相原篤志所長は「市民講座を開催できる場所や災害時の避難場所が、新庁舎に設けられるかどうか、実施設計に向け検討したい」と話す。

